

奉納御礼 北島三郎さんより胡蝶蘭が届く

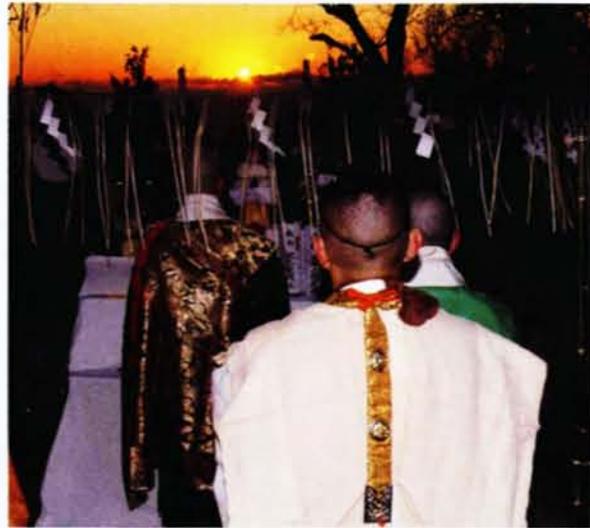
演歌の大御所・北島三郎さん（八王子市在住）より、紅白の胡蝶蘭二基を御奉納頂きました。

この胡蝶蘭は、去る十月二十五日、京都競馬場にて開催されました競馬のGIレース、「第七十六回菊花賞」において、北島さんの所有馬であるキタサンブラック号が見事に優勝を果たした御礼として、当山へ奉納されました。

茲に感謝と御礼を申し上げます。



迎光祭のお知らせ



高尾山頂の大見晴らし台より、赤々と燃える初日の出を拝する、高尾山ならではの年中行事です。

山頂に設けられた祈願所にて、山内の僧侶・山伏出仕のもとに一年の安全を祈願して迎光祭が行われ、参加者全員で新年を祝います。

晴れた日には霊峰富士を眺める事もでき、多くの参詣者・登山者で賑わっています。

け 汚れ無き蓮花に仏座す



絵・橋本豊治

蓮花は、仏陀の生誕を告げて開いたと言われている。インドでは様々な神に捧げられたり、神々が蓮の台座に座られたりしている。

泥水の中から汚れの無い花を開くこの花は、純粹のシンボルで、俗塵に染まらない君子の花と言われている。また、種子の多いことから多産の象徴であった。

理趣経百字の偈に次のような文がある。

如蓮体本染 不為垢所染
蓮花は汚泥に生まれても、花は染まらず垢つかず。



句・菅谷秀文

おはなし散歩道 タヌキの庄屋さん

八王子市 池田美絵

冬になり、恩方の山に食べ物が少なくなると、子タヌキのポン吉は里に下りてきた。里には庄屋さんの家があり、お屋敷の台所からほんわかとした湯気が立ち上っているからだった。

「いいなあ、あったかそうで……。おいらも庄屋さんのところでご飯をいただきますたいなあ」

ポン吉は、親とはぐれたみなし子で、庄屋さんの家のあたかそうなたぬきがうらやましかった。台所の窓から中をのぞくと、かまどの上に鍋がかけてある。おかみさんが芋を煮はじめたようだった。運がいいことに台所にはだれもいない。

「鍋のふたに化けよう。そうすれば、芋が煮えたらまっさきに食べられるもんね」

ポン吉のおながが、グーッとなった。

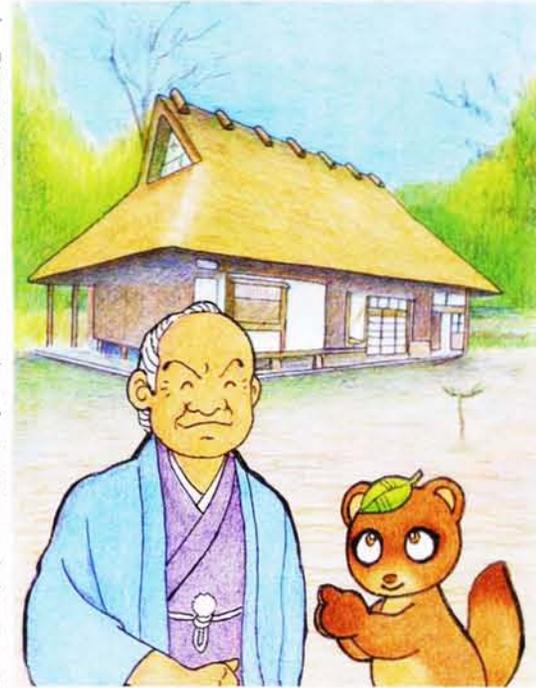
「エイ、ヤー！ 見事に木のふたに化けたのだが、鍋が熱くなるにつれて、いたたまれなくなつた。

「これじゃ、おいらが煮えちゃうよ。ほかに食べるものはないかなあ」

ポン吉は、もとの姿に戻ると台所のなかを見まわす。すると、棚のうえに大きなぼたもちが二個あるのを見つけた。

「とりあえず、ぼたもちで腹ごしらえしよう」そうしてぼたもちにかぶりついて一息ついてみると、座敷の方からおかみさんがいそいそとやってくるのが目に入った。「ま、まずい……」

もちに化ける。「ふふふ、ぼたもちがまだのこっているわ。みんなに内緒で食べちゃいましょう」



悪さをしません」ポン吉はひたすら謝るが、おかみさんのいかりは当分やみそうになかった。

すると、台所のさわぎを聞きつけて、庄屋さんがやってきた。「まだ子どもじゃなかかわしが山に放してくるか」

「痛たたた！」ポン吉はたえきれず、正体をあらわした。「こら、タヌキじゃないか！ よくもぼたもちを食べたな。おまえをタヌキ汁にしてやる！」

「許してください。もうら、そのタヌキをよこさない」

ポン吉は庄屋さんの手にわたった。「助けてくださいでありがとうございます」

ポン吉が庄屋さんに礼をいうと、こう言うでは

ないか。「おまえさん、ほかにも化けられるかい？」

「はあ、なんとか」

「それなら、わしに化けてみてくれ」

ポン吉がエイッと気合を入れると、ポン吉は庄屋さんに化けた。

「ほう、なかなかのものじゃ。どこから見てもわしじゃよ。わしは一度、花のお江戸で遊んでみたかったんじゃよ。そのあいだ、おまえはここでご飯をたらふく食べなさい」

それからというものが、庄屋さんに化けたポン吉はおいしいご飯をこちそうになり、あたたかいふとんで寝た。一週間がたったころ、庄屋さんは家に戻ってきた。

「おまえのおかげで、わしは十分息抜きができたよ。これからは、うちの子にならなさい」

ポン吉は、庄屋さんの家で過ごすようになり、おかみさんもちたずらを許してくれたそうだ。

(さし絵・小出 茂)